

奨励金No.1642

女性作家による文学と科学の対話： 有吉佐和子『複合汚染』を中心に

江口 真規
筑波大学 准教授

Dialogue between Literature and Science by Female Writers: Focusing on Sawako Ariyoshi's *Fukugō-Osen* (Compound Pollution)

Maki Eguchi
University of Tsukuba, Associate Professor



有吉佐和子の『複合汚染』は、1970 年代に『朝日新聞』に連載された小説であり、農薬を中心とする化学物質の人体や環境への影響が取り上げられている。本研究では、連載時の記事の分析を通して、新聞小説というメディア的観点から本作の分析を行った。安全性の証明の困難さと科学的実証主義への批判という姿勢には、同時代の記事との相互関連がみられるだけでなく、小説が科学技術に対する見方に影響を及ぼしていることがわかった。また、「環境カフェ」の実践を通して、文学と科学の対話の可能性について検証した。

Sawako Ariyoshi's *Fukugō-Osen* (Compound Pollution) is a 1970s novel that was serialized in the *Asahi Shimbun*. It covered the effects of chemicals on the human body and the environment, with a primary focus on pesticides. Through examining newspaper articles that were published during this novel's serialization, this study analyzed *Fukugō-Osen* as a newspaper novel from a media perspective. *Fukugō-Osen* highlighted the difficulty of proving safety standards and critiqued scientific positivism. This approach not only intersected with contemporary articles but also influenced perspectives on science and technology. Additionally, this study examined the dialogue between literature and science in the “Kankyo Café.”

1. 研究内容

1.1 研究の背景と目的

有吉佐和子の『複合汚染』は、1974 年から 1975 年に『朝日新聞』朝刊に連載された新聞小説であり、農薬を中心とする化学物質の人体や環境への影響が取り上げられている。本作は単行本化されるとベストセラーとなったが、政府や科学者、技術者からの反論が続き話題となった。

本研究では、高度経済成長期に発生した公害への危機感を背景に発表された本作を、エコクリティシズム（環境批評）、および新聞小説というメ

ディア的観点から読み解くことを目的とする。科学技術の進歩が人体や自然環境に深刻な影響を与えることが次第に明らかになっていった当時、『複合汚染』は、科学の知識を伝えるにはどのようなメディア・ジャンル・構成・文体が効果的であるのかを実験的に試みた小説である。本研究では、『複合汚染』執筆の背景を明らかにし、小説連載時の新聞記事から読み取れる社会的・科学的言説と本作に対する反応を調査する。そのうえで、本作を課題とする読書会を開催することにより、文学と科学の対話の可能性を検証することを目指す。

1.2 研究成果

1.2.1 『複合汚染』執筆の背景と、和歌山市における資料調査

有吉佐和子は、1960～70 年代の人気作家として、小説・戯曲・ルポルタージュの創作を精力的に行い、作品の映画化やテレビドラマ化も多くなされている。1977 年の小説『青い壺』は、2025 年上半期のベストセラーになるなど、近年再注目されている作家でもある。その一方で、「純文学」を中心とする当時の文壇からは批評の対象から外され、現在の文学研究においても、作家や作品について十分に論じられているとはいえない状況である（井上謙・半田美永・宮内淳子編『有吉佐和子の世界』2004 年）。

有吉の経歴と作品群における『複合汚染』執筆の背景を辿るため、2025 年 9 月に、有吉の出身地である和歌山市での資料調査を行った。有吉佐和子記念館、和歌山市民図書館「有吉佐和子文庫」において、有吉の経歴や、蔵書約 1,500 冊の収蔵資料一覧について調査した。また、和歌山市立博物館では、『複合汚染』の自筆原稿（個人蔵）と、箱に入れられ保存された「複合汚染取材メモ」（個人蔵）の一部を確認することができた。

『複合汚染』の「あとがき」では、有吉が本作の執筆に 10 年以上を要し、読んだ書物は 300 冊以上、また何十名もの専門家に取材を行ったと述べられている。今回の調査では、この「取材メモ」の全体を閲覧することはできなかったが、今後の課題として提示しておきたい。

1.2.2 小説連載時の新聞記事の調査

『複合汚染』の連載時期を中心とする『朝日新聞』記事を調査し、小説の背景にみられる科学技術の変化や、本作に対して寄せられた批判や意見について分析を行った。

本作で扱われるトピックは、大気汚染、食品添加物、工場廃液、合成洗剤、有機農業と多岐にわたるが、新聞記事の内容と『複合汚染』の主題に

は相互関連が見受けられる。たとえば、『複合汚染』の連載予告が掲載された紙面（1974 年 10 月 7 日）には、前月に生じた原子力船「むつ」の放射線漏れの安全基準に関する記事が掲載されている。そこでは、専門家が現地を訪問することなく、不十分な資料のみで地域住民への答申を行った点が批判されている。このことは、「物質科学文明の高度な発達」が、「科学の実証主義では安全性を支えきれない事態をひき起している」（『複合汚染』上巻、68 頁）と述べられるように、安全性の証明の困難さと科学の実証主義への批判という小説の基本姿勢と共通している。また、『複合汚染』は、当時の科学技術をめぐる問題を反映しているだけではなく、小説が科学技術に対する見方にも影響を及ぼしていることが読み取れる。たとえば、長野県のサル群れに「奇形」のサルが見られることを報じた記事（1975 年 5 月 24 日）では、『複合汚染』での農薬とブタの話をもとに、サルのエサとなっているリンゴの農薬が原因なのではないかと推測がなされている。一面コラム「天声人語」においても、農薬や肥料に関する話題で『複合汚染』に言及する例が見受けられる。

当時の新聞連載小説では、投書や電話を通して読者の声が届けられたが、『複合汚染』の場合には、食の安全に関する数多くの問い合わせがあったことがわかる。特に有機農業については、本作の影響を受けて講演会などが開催され一般的に知られるようになった（1976 年 10 月 3 日）。農薬や食品添加物への懸念に対する、農林省や厚生省からの返答の記事も見受けられた（1975 年 5 月 24 日）。

1.2.3 ジェンダーの観点から読む『複合汚染』

『複合汚染』に関して着目すべき点の一つは、ジェンダーの側面である。当時有吉は、参議院議員選挙に立候補した婦人運動家の市川房枝と紀平梯子の応援演説を行っていた。差し入れのおにぎりを通して農薬の話題に触れたことや、自動車の

排気ガスを原因とする頭痛がきっかけで、身近な汚染の問題について調べ始め、『複合汚染』が執筆された。

新聞記事の調査からも、特に女性読者から本作の支持が高かったことがわかる。連載を切り抜いて「私製版」の『複合汚染』を制作し熱心に読んでいた主婦や、有機農業を実践するようになった農家の女性からの声が寄せられている。同時代には、都市部での加工食品の広まりや、労働基準法における女性の就労上の制約、男女の賃金格差について議論した記事も見受けられ、女性の政治参加や就労、家事の変化の傾向についてもうかがうことができる。

このような本作の特性を鑑みれば、女性と自然の表象や両者の概念的な結びつき、男女の書き手による描写の差異に焦点を当てた「エコフェミニズム」の観点からの分析にも値すると考えられる。本研究を通してエコフェミニズム研究会に参加し、フェミニズムと環境運動、科学技術との関連や、日本での受容の歴史に関して理解を深め、『複合汚染』に関する先行研究も参考にして作品の解釈への適用をはかっているところである。

1.2.4「環境カフェ」における対話の実践

本研究では、つくば市にある国立環境研究所が主催する「環境カフェ」への参加と企画を通して、文学と科学の対話の可能性を模索した。「科学と文学のあいだ（科学的知見と文学的洞察の交差点）」をテーマとする回に参加し、「環境カフェ」の手法や対話のあり方について知見を深めた。また、レイチェル・カーソンの『沈黙の春』と『複合汚染』にみられる化学物質の影響に関して論稿を発表している、同研究所の多田満氏と情報交換を行った。

その後、多田氏の協力を得て、2026年5月に「環境カフェ in 筑波大学」を開催し、文学や建築を専攻する学生や研究者など5名が参加した。参加者からは、「対話」という形式で、異なる分野の視点を取り入れながら環境について考える機会に

なったという意見が寄せられた。今後も筑波大学での「環境カフェ」の定期的な開催を予定しており、『複合汚染』を課題図書とする回を検討している。作品で提示されるトピックに詳しい専門家を招き、刊行から50年を経た現在の視点から作品を読み解きながら、文学作品を用いた科学コミュニケーションのあり方を検証していきたい。

2. 発表（研究成果の発表）

【口頭発表】

1. Maki Eguchi, “Dialogue between Literature and Science by Female Writers: Sawako Ariyoshi’s *Compound Pollution* and Rachael Carson’s *Silent Spring*” (XXIV Congress of the International Comparative Literature Association 口頭発表)、KINTEX (韓国)、2025年7月30日。
2. 江口真規「有吉佐和子『複合汚染』にみられる文学と科学の対話——新聞小説としての側面から」(2025年度 ASLE-Japan／文学・環境学会全国大会口頭発表)、サンラポーむらくも(松江市)、2025年8月30日。
3. Maki Eguchi, “Reading Modern Japanese Literature through Ecocriticism: A Case Study of Sawako Ariyoshi’s *Compound Pollution*” (International Conference on Linguistics and Cultural Studies 6: Multidisciplinary Perspectives on Language, Literature, Culture, and Teaching: Challenges and Innovations 口頭発表)、Hasanuddin University (インドネシア)、2025年11月12日。招待あり。